
お隣宇宙

† アラクネ †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お隣宇宙

【Nコード】

N9439H

【作者名】

十アラクネ十

【あらすじ】

人の心の中というのは、それぞれが小さな宇宙。よく知っているつもりの人物でも、自分の常識が本当に通用しているのかどうかは、実際の所怪しいもの……。

序章（前書き）

作者ページから、あらくねのホームページに移動出来ます
良ければ一度遊びに来て下さいね！

序章

人の頭の中というのは、幾億の思考がひしめく混沌のスープだ。

同じ場所で同じ物を見ていても、それをどう感じるかはその人次第。

渦巻く思考の破片がグルグルと混ざって合わさり、それが良い物になるなら結構。

悪いものになるなら、これはこれはご愁傷様。

人はそれぞれ頭の中に小さな宇宙を抱えている。

恐ろしく変化しやすい、流動体の水みtainな宇宙。

それを忘れるべからず。

1・折原俊一

しつとりと暑い、夏の日の朝六時。

厚いコンクリートに隔てられた隣の部屋から、今朝も耳障りな目覚まし時計の音が響いてくる。

ここは壁の薄いボロアパートではない。きちんと頑丈に造られた、立派な新築高級マンションなのだ。

……にも関わらず、毎朝毎朝俺を豊かな安眠から引き起こす、この雑で下品な騒音のうるささといったら――！！

俺はむつつりとベッドから起き出すと、いつものように洗顔・髭そり・コーヒーマーカーのセットなどを始める。

俺の仕事は昼過ぎから始まる。

故に、こんな朝っぱらから身仕度を整えている必要などはない。

しかし、壁向こうの敵に己の行為の無意味さを伝える為に、俺はあえて毎朝こうしている。

同じマンションに住んでいるのだ、間取りからして、俺の寝室の場所を予想するのは簡単だっただろう。わざとその真横にあのような騒音器具を置いて、ささやかな嫌がらせを楽しんでいることは間違いなかった。

しかし、そんな小細工など俺には何の効果も無い。

「冷静沈着・品行方正」

軽くリズムカルに呟きながら、濃く落としたコーヒーを飲む。

舌を滑って喉に落ちる、深い苦みが心地良い。

「学歴優秀・将来有望」

ビリビリ痺れるような熱さ。一気にゴクリと嚥下し、その感触に目を細める。

「俺は勝ち組。生まれながらのスーパーエリート」

食道を焼いていく熱は、そのまま俺のエネルギー。

そう、エネルギーが必要なのだ。

俺のような完璧な人間というのは、どうしても一般庶民からひがみや妬みを買ってしまうもの。事実、他人からの理不尽で唐突な攻撃は日々後を絶たない。

隣の部屋の爆音目覚まし女など、典型的で実に分かりやすいというものだ。

俺は飲み干したコーヒークップをテーブルに置き、ラフだが上品でセンスのいい、某ブランドのシャツに着替えた。

時計を見る。

ほら、いつも通り。

隣の部屋からバタバタと、玄関に走り込む騒がしい音が響く。

俺はシャツの襟元を整えると、ダストボックスから小さなゴミ袋を取り出して口を縛った。

それを片手にひょいと持ち、ピカピカに磨いてある革靴を履いて外に出る。タイミングはばっちりだ。

ちょうど扉を閉めた時、隣の家の玄関が開いた。

「あ、おはようございます」

俺の爽やかな挨拶の声に、隣の部屋の住民、爆音目覚まし女がパツと反応する。

「あらあ、おはようございますう！」

わざとらしい舌足らずな喋り方。非力で無害な女を演じているつもりなのだろう。

しかしながら、斜め下から睨みあげるような狡猾な視線、その滲み出す敵意を俺が見逃すはずもない。

「いやあ、この時間って本当に清々しいですね」

マンション設置のゴミ収集用物置は一階にある。

女と一緒にエレベーターに乗ると、俺はにこやかに上機嫌を演じ

てみせた。

「今日はこれから、出勤時間までテラスで読書を楽しむつもりなんです。大切ですよね、こういう趣味に費やす時間ってというのは」

女の浮かべる笑顔、やたら大袈裟な反応の一つ一つが滑稽で、吹き出すのを堪えるのが精一杯だ。

「それじゃ、失礼しますう」

女はペコリと頭を下げ、去り際に鋭い一瞥を残して車に乗り込んだ。

車の走り去る音を聞きながら、俺は今朝も勝利の手応えに身震いする。

2・西田紗枝

ゝ愛され愛され、愛は私の存在そのものゝ

……なんちゃって。

ジリジリジリジリジリ

頭に響く嫌な音が、半覚醒の私の脳を容赦なく揺さぶる。

ジリジリジリジリジリ

だんだん大きくなる音。ああはい、起きる時間ですよ、分かっています。分かっていますってば。

「んんんん……っ」

ベッドから這いずるようにしてテーブルに辿り着き、ようやく目覚まし時計を止める。時刻は6時。本当に朝が苦手で、店で最大音量の時計を買ったにも関わらず、毎朝毎朝この様だ。

けだるい眠気が残った体に喝を入れて、まずするのは熱いシャワーを浴びること。女の一日はシャワーから始まり、シャワーで終わると決まっています。

超スピードでシャワーを終えて出て来ると、テーブルの上でケータイが光っている。

ディスプレイ確認、『マンション管理人』。忙しいのでシカトする。

発泡性のミネラルウォーターが心地良く喉を潤し、半覚醒の頭をスツキリさせてくれる。

ドレッサーから溢れて床にまで散らばった、一流ブランドの化粧品や服やアクセサリ。

キラキラ。キラキラ。

慣れに慣れた自己流の華やかメイク出勤バージョンを始めると、不思議にシャツキリ伸びてくる背筋。

メイクは私にとってのプロテクトのような物。綺麗な服やアクセやいい香りの香水、隣に並べる男もそうね。

何に対してのプロテクトなのかは、正直自分でもよく分からないけど。

最近買い代えたばかりの大型テレビをつけ、DVDモードのボタンをON。

聞き慣れた静かで慎ましい音楽が流れ、テレビの大画面に、優美な自然に溢れた山の様子が映し出される。

『Beautiful World』

題名と共に現れる、数々の油絵と一人の女性。

ありふれたドキュメンタリーのありふれた流れ。

自然と自然を描く画家を追う、無数にあるつまらないドキュメンタリーDVDの一枚。

私は目元に陰影を描きながら、もしくは睫毛に濃くボリウムを与えながら、その映像を見るともなく見る。

何百何千と見た映像。

豊かな自然に溶け込み、絵画の愉しみを語り笑う、質素な主人公の姿を見る。

質素で化粧気も無く、地味で、そしてあまりにも自然の美しさに満ち満ちた。

懐かしい、実の姉の姿を見る。

キラキラ。キラキラ！

ささやかなラメを目元に飾って、今朝も完璧にメイク完了。

時間的に余裕は無いけど、左右・前後のフェイスチェックは欠かさない。

メイク道具を出しっ放しのまま、バタバタと玄関を出るのもいつもの事。

「あ、おはようございます」

出掛けに、爽やかな笑顔の男に挨拶される。隣人だ。

けれど自然に出くわしたわけではない。この男の活動時間が、もっと後であることは知っている。

「あら、おはようございますう」

とりあえず今朝も、につこり極上笑顔をサービスしてあげる優しい私。整えた睫毛の滑らかな動きを意識しつつ、少し上目使いに相手を見る。

「いやあ、この時間って本当に清々しいですね」

隣人の男は不自然な流れで、早起きの有意義について語っている。私に会う為に時間調節しているのはバレバレなんだけどね。

ニコニコと相槌を打ち、全部分かっているのを悟られないようにしてあげる。

正直、エリートを鼻にかけたこのテの男はあんまり好きではないけれど。

自分に好意を抱いている高所得者、顔もまあそこそこくれば、ないがしろにする理由も見当たらないでしょ？

私は綺麗で華があって、相手を気持ち良くさせる接し方を心得ている。

秘書をしている会社でもファンは多く、内部外部問わずに誘いは多い。

自惚れ、なんて思わないでよね。これは日々の努力に対する代価。努力して学んで積み上げて、ようやく手に入れた当然の代償なのだから。

キラキラ、キラキラ。

頭の中に、さっき見ていたDVDの映像が紛れ込む。

《ここに溢れるのは無償の豊かさ。ただ受け入れ、ただ返し交わるだけ》

澄んだ姉さんの声。

私は目を閉じ、何度も頭の中でその声を反芻する。

（さやか姉さん）

惨殺されてしまった姉の、もう二度と聞けない悲しい声。

3・管理人

今日もまた朝が来る。

詰まらない一日の始まり。

顔を洗って短く刈った髪を整え、ドレッサーから適当なシャツを選ぶ。

パリパリに糊付けされた清潔なシャツ。

毎週月曜日に、母が寄越す係の者が入れ替えていつてくれる。興味はない。

僕はさして予定も書かれていない手帳を左手でめくり、右手で電話の子機を取った。

短縮ボタンを押していつもの番号にモーニングコール。

「……」

僕はここ、都心からすぐの素晴らしい立地条件・抜群のセキュリティ・お洒落な外観に恵まれた高級マンションの管理人だ。

もちろん自分で築いた地位ではない。資産家の両親が、三十を過ぎても宙ぶらりんでいる末息子を心配して与えた、形だけの役割である。

大切なデータの管理や家賃の徴収その他など、実の所、誰がやっているのかも知らないのだが……。

やはり興味は、無い。

「……」

きっかり25回コールしてから電話を切る。彼女は出なかったが、最近はいつものこと。

仕事絡みの付き合いで行ったクラブで、たまたま出会った一匹の蝶。気まぐれなのは仕方ないと諦めている。

このマンションの一室を無料提供することも、朝のモーニングコールをすることも、彼女を身近に感じたいために僕が自ら提案したことだ。

困っているとか、世話してやっているとか、そういう下世話な感情は無い。

僕はひとまず先週輸入したばかりの希少なコーヒー豆を丁寧に挽き、少し濃く落として香りをゆつくりと楽しんだ。

手に持ったカップからコーヒーの香りを吸い込み、朝陽に照らされた街を最上階のバルコニーから見下ろす。

こんな静かな朝の光を浴びていると、決まって幼い頃のことを思い出した。

特に鮮やかな記憶は、小学校低学年だった頃のこと。

当時エセ冒険家だった僕の祖父は、本来は入国を許されていない国ばかりを選んで旅して回っている変わり者だった。

金に物を言わせたばかりではない。警察関係者や政治家など、様々な伝手を使ってそれを可能にしていたということは、大人になってから知ったこと。

そんな旅を親族達はみな嫌がっていたが、僕だけは違った。喜んで同行する僕を、祖父はとても可愛がってくれたものだ。

人がほとんど入ったことのない土地、そのクラクラするような青臭さ、不思議に張り詰めた透明な空気を、僕は純粹に愛した。

とにかく違法な旅だったから、長年問題が起きなかったことの方が不思議だ。

某国の豊潤な森を数人のガイドと共に見て回っていた時のこと、ガイドの一人がふと話した内容に興味を持ち、祖父が更に奥深くへ踏み込むことを望んだのが始まり。

怯んで去った者を除いて、二人だけガイドが残った。今思えば、その二人は物事の真の危険を見落とした無能者、何の役にも立たない素人でしかなかった。

祖父と僕は、そして当然のように行ってはいけない部分へ入り込んでしまう。

ガイドが道を見失い、さ迷うこと二日。疲れ切った状態で、僕達はある部族に出会った。

褐色の肌に泥や葉や実で飾りを施した民族。石を削って作った古代さながらの槍を向けられ、ガイドが怯えて発砲した。それが良くなかった。

手から火を噴いて仲間を傷付けた僕達を、彼らは神、もしくは悪魔といった超存在に認識したらしい。（しかしあくまで、無事帰国してから理解したこと）

疲れと緊張と恐怖でただボウツと成り行きを見守るしか出来ない僕達の前で、彼らは奇妙な歌を歌い踊り踊り、喧騒の最中に愛らしい少女を引き立てて来た。

他の者のような泥の化粧や装飾品などは一切身に付けておらず、少女はひたすら泣きじゃくって非力ながらも抵抗していて、しかし男達に難なく捻じ伏せられてしまい、木の台の上で悲痛な叫びを何度も上げて何度も何度も何度も何度も。

叫びはやがてグロテスクな絶叫になり、その頃になってようやく僕は気付いたのだ、少女が。

生きながら、解体されていることに。

そして激痛に悶絶する少女を背景に、恭しく僕達の前に真つ赤な少女の肉が差し出され……

それは彼ら部族にとっては、ごく当然な行いだつた。

深い森に住む彼らにとって、最も強く絶対的な存在は肉食獣。豹でもライオンでも関係ない、肉を喰らう獣は彼らにとっては全ての神の使い。

すなわち肉を喰らう者こそが神であり、神は肉を喰らうのが当然なのである。

僕は情けなくも失神してしまったのでその後のことは知らないが、結果的には、先に帰ったガイド達の通報により、警察が僕達四人を助け出した。

ただ、不思議に無事逃げ延びたことへの喜びは少なく、いつまでも重いわだかまりが胸の奥に残り続けている。

それはすなわち、口にすることの無かった少女の肉に対する未練。自分の為に刻まれた少女の肉の味、それを知らないことがいつまでも心に引っ掛かっていて。

自分でもおかしいと分かっている。

幼年期に衝撃的なシーンを見たことがトラウマとなり、恐怖感を紛らわす為に感情をすり替えているのだ、そんな風に自己分析してみたこともあった。

しかし……。

僕は堂々巡りの回想を断ち切り、爽やかなバルコニーに背を向けた。

コーヒーの香り漂うリビングダイニングは、必要最低限の物しかなく、ひどく殺風景でガランとしている。

僕にとっての生活を、そのまま具体化させたかのようなのだ。

僕はコーヒークップをテーブルに置き、広々とした部屋を横切つて奥の扉を開いた。約十畳分ほどのそこは、本来ウォークインクローゼットとして作られた空間だ。

僕はその閉鎖された空間を、愛しい人の形見で満たしていた。

「ああ……」

その濃厚で愛しいにおいを感じる度、僕は深い恍惚に声を上擦らせる。

天井には空と雲。正面には花と草。左壁には月。右壁には太陽。

それぞれテーマ別に分けられた、それは美しい大小の油彩だった。

「おはよう。今日もいい天気だよ」

ライトアップされた一面の絵を眺めながら、僕は誰にともなく呟く。

零れ落ちそうな自然の潤いを湛えたその絵は、僕が愛した女性画家の作品だった。

常に自然の息吹をまとい、現代の汚れなど微塵も感じさせない女性。僕は小さな個展で出会ってすぐ、その魂の透明さに惹かれた。

人の欲や傲慢さとは全く無縁の。

人でありながら自然と一体になった、まるで生まれたばかりの緑の女神……。

生贄として差し出された森の少女、一人だけ何の飾りも身に着けない純粹な裸体が、女性画家の汚れ無さと重なって交じり合う。一つの神々しい光となる。

僕は正面の一番大きな一枚に触れ、右下に残された彼女のサインに恭しく口付けた。

“ S A Y A K A ・ U ”

4・再び紗枝

12日・PM3時。

この時間はいつも暇。

社長室で書類のチェックなんかをしながら、私はこんな時間いつも姉のことを考えている。

私と姉は二卵性の双子だった。

同じ年、同じ月日に生まれたのに、姿はおろか中身まで全然違っていた私達。

派手で癪癪持ちだった母と、素朴で穏やかだった父。

それぞれ二人のレプリカみたいだった私達姉妹は、父母の離婚に伴って住む世界を別にした。

当時まだ10才だった私は、母との生活のめまぐるしさにかまけて、特には何も感じていなかったが。

高校に上がる頃には、理解するようになっていた。

そう、我がままな母が本心では強く父を求めていたように。

本当は私も、いや、血を分けただけそれ以上に、どれだけ姉を求めていたのかということ。

理解し認めてからは、私なりに辛い日々を送った。自分の中に常にある空白を知らながらも、それを埋める方法を全く見出せない。消すことも慣れることも出来ない、どうしようもないもどかしさを、何年胸に抱えただろう。

漠然とした喪失感に苛まれ続け、テレビのドキュメンタリー番組の中に偶然姉を見つけた頃、私は二十歳の夏を迎えていた。

ああ何て彼女らしい、それが最初の私の感想。姉は小さな画廊と契約を交わし、山や海や草花など自然を描く画家になっていた。

たまたまテレビの取材を受けたとはいえ、毎月の収入なんて微々たるものだったろう。

経済的には母に着いて行った私の方が恵まれていたはずなのに、姉は羨ましくなるほど満たされた顔をしていて。

（ああ、いつかまた姉に寄り添いたい）

涙が溢れるほど熱くなった胸の締め付けは、少し恋に似ていた。

シスターコンプレックス満開な妄想を抱き、番組を編集したDVを探して買った私は、それから毎日飽きることなく見続けた。

姉さん姉さん姉さん。

会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい、さやか姉さん。

想っただけで、何ひとつ実行に移さなかった自分を、今は心から呪う。

血縁との事、いずれ時が解決すると漠然とした樂觀を抱いていた自分を、今心から恨んでいる。

数年後、私はまた姉をテレビの報道で見ることになったから。

今度は綺麗なドキュメンタリーなどではなかった。

オーストリア郊外の豊かな森林の中で、姉は切り刻まれた姿で発見されたのだ。

眼球、唇、乳房、そして女性器の一部と犯人はまだ見付かっていなくて……

（でもね。さやか姉さん）

もう安心して、と私は声に出して呟く。

警察が異様に早く手を引いた姉の事件。私は納得がいかず、預金を全て使い果たし、水商売で金銭を補ってまで姉の軌跡を追った。

ほんの些細な情報も漏らさぬよう、姉の辿った各国の辺境を尋ねて歩き。

地道な努力と執着の末に、ようやく、謎を解いた。

あんな残忍な事件だったというのに、警察があっさりと手を引いた理由。

いや、警察が手を引くよう圧力をかけた、その。

存在の大きさを……。

5・再び俊一

光り輝く真昼の太陽。俺に相応しい、汚れのない純白の眩しさ。

俺は手鏡で顔と髪のチェックをし、シャツの衿を直してから車を降りた。

駐車場から会社までの僅かな道のりさえ、俺のような人種にとっては花道、いやいや、イバラの道となる。

通りすぎり、チラチラとこちらを見ずにはいられない他社のOL達。

恐らく俺の素晴らしき業績を噂で伝え聞いているのだろう、サラリーマン達の嫉妬に溢れた視線。

やれやれ、全くもって彼らの不躰な視線には、毎回閉口させられる。

まあ、これも特別な人種として生まれた者の宿命なのか。

そんなことより、今日は水曜日だ。

そう、受付カウンターに例のあの子がいるはずの日。

うちの会社にしては珍しく、中途採用で入社して来た変わり種なのだが。

その清楚で品のある容姿、育ちの良さを滲ませる優雅な仕草を思い出し、俺は柄にもなく少しだけ口角を上げる。

当初の印象は完璧なまま今なお続いている。

横においても恥ずかしくないと思える女に出会ったのは、本当に一体何年ぶりだろうか。

俺は気分良く、けれどいつも通りのクールさを崩さず、金に輝く社員用カードを使って専用入口を抜けた。

俺が正面ホールに姿を現すなり、カウンターにいた彼女の顔に笑顔という名の華が咲く。

「お早うございます。今日も一日、宜しくお願い致します」

他の女性社員に変わらず、彼女もやはり俺に好意を抱いているのが分かる。

丁寧な挨拶の中にも、俺に対する特別な感情が所々見え隠れしているのを、彼女はきつと知られていないつもりなのだろう。

他の女性社員が嫉妬しそうな極上の笑顔を投げかけ、俺は短くクールな挨拶を返す。そのまま部署に急ごうとしたのだが。

「あ！ あの、折原さん」

意外。

奥ゆかしい彼女が、自発的に話し掛けて来るなんて、今までではな

かったことだった。

「何だい？」

内心を隠して余裕の笑顔を向ける俺を、彼女の華奢な手が迎える。

可愛いピンクにラメを散らした爪がキラキラ輝き、ささくれの一つも無い綺麗な手が。

手が。

色気の無い、滋養剤を掲げている？

「あのこれ、良かったら飲んで下さい。最近お疲れのようだから」

につこりと天使のような微笑みを浮かべて、あまりにも似つかわしくない滋養剤の瓶には、『慢性疲労』『年齢を感じ始めたら』『中高年のしつこい疲れに』

「は？」

「これよく効くって、専務がよくお飲みになってるんですよ。折原さん、最近クマとかひどいから……」

専務？ 五十絡みのあのエロジジイ。そいつがよく飲む物を俺が？ ちよつと待てよお疲れのようって、クマがひどいって俺が？ 俺がか？

頭の中に怒涛の勢いで混乱が吹き荒れ、ニコニコ笑う彼女と自分だけスポットライトが当てられているような気分になった。

何だ？ 意味が分からない。だって俺は、いつもクールでソツが無くて完璧で颯爽としていていつだって何の問題も。

「あれー、香織ちゃん折原にだけズルくない？」

いつの間に入って来たのか、同僚に肩を叩かれて我に返った。

「おはようございます。やだ、田島さんにはこんなの必要ないじゃないですか」

口に手を当てて笑う彼女に、田島がこれぞチャンスとばかりに馴れしく話しかけているが、もはや俺にはどうでもいい。

真っ白になった頭を何とか動かし、ありきたりな礼を述べてその場を離れるのが精一杯だった。

ピカピカな靴からきちんと折り目の付いたズボンがすらりと伸び、腰で締めたベルトは当然一流ブランドのもの。

清潔感のあるシャツは襟元にさり気なく工夫のあるイタリアブランド、カフスにだってひと工夫ある。同じくイタリアブランドのネクタイをきつちりと締め、どんな激務にも爽やかな笑顔で対応する疲れ知らずのスーパーエリート。

それが俺。

それが俺のはずなのに。

なのになのになのに、滋養強壮剤？ しかも五十過ぎの専務愛用

の！

疑ったこともなかった自己イメージにヒビが入り、俺は仕事の合間も鏡を見るのがやめられなかった。

今まで仕事に集中出来ないことなどない。パソコンを打ちながら、デスクに置いた鏡が気になって仕方ないなどもっての外。

（どうしてだ。どうしてだどうしてだどうしてなんだ）

自分の外見を過信していて、服装やヘアスタイルの乱れ以外はあまりチェックしていなかったかもしれない。

言われて改めて観察すると、成る程、目の下の血色が悪い。身を引いて少し遠くから映すと、更にその血色の悪さが目立つ。

（あああ、よく見たら肌も荒れてないか？ 何でだ、いつからだ？ 剃刀負けとかじゃない、いつからこんな疲れた顔に）

休憩時間を告げるチャイムが鳴り、けれど仕事はほとんど手付かずのままであることに気づき、再びショックを受ける。

（いつも仕事は一時間毎に段取りを決め、完璧にこなしてきた。こんなのはおかしい、間違ってる、落ち着け落ち着け落ち着け）

何事にも原因がある。冷静に考えれば必ず突き止められる。原因を突き止めて冷静に対処し、速やかに解決する。それが出来るのが俺だ、スーパーエリート of 俺なのだ。

（最近変わったことと言えば……）

普段の生活を考え直してみても、すぐに原因に思い当たる。

（そうだな、単純なことじゃないか）

寝不足だ。最近ずっと隣の馬鹿女に合わせて、無駄な早起きを続けている。睡眠時間が足りていないから、代謝のバランスが崩れてしまっているのだ。

（なんだ、だったら簡単なこと……）

思わず安堵の笑みを零しそうになった俺は、そこでハッと恐ろしい事実気付いた。

同僚達のざわめきが一瞬で背後に去り、電流を通されたように強張る体を冷たい汗が流れていく。

（こんな風に消耗しているなんて、爆音目覚まし女の思惑通りじゃないか！！）

6・栗栖香織

今日は月曜日。

あたしにとって、一番割のいい仕事が待っている日だ。

早起きは苦手だけど、足取りも羽のように軽い。

あたしは昔から極度の飽き性で、一つの仕事が長く続いた試しがなかった。週三か週四程度のバイトを見つけては辞め、辞めては見つけ。

だけど今の仕事、大手企業の受付業務は長く続いている。

華やかで人に自慢出来るし、社員達からは可愛いがられるし、時給もいい。何よりも週二回だけの出勤でいいのが長続きの秘訣だ。

だけでもちろんそれだけでは金銭的に辛いので、この毎週月曜日だけの臨時バイトで補っているのである。

あたしは跳ねるように早朝の繁華街を抜け、髪のそよぎに開放感を感じながら目的の場所に急いだ。

そこは一等地に建つ、超高級セキュリティマンション。

憧れるけど、高根の花。美しい玄関ホール、広くて素敵なエレベーター、近代的かつ豪華極まりない部屋の内装。それらに間近で触れ合えるっただけで、あたしにとっては最高にセレブなシュチュエーション。

エレベーターに乗り込み、迷わず最上階のボタンを押す。片面ガラス張りの箱の中で、下に遠ざかっていく街を眺めるのがとても好きだ。

あたしは管理人専用空間になっている最上階で、一週間分の事務処理を任されていた。

簡単な内容だ。事務経験がある人なら、誰でも二時間かからずに終わられるだろう。

なのに、一度の仕事で貰える報酬は二万円。

破格値もいい所だ。求人募集には週一度の事務としか書いていなかったなので、面接で報酬を聞いた時には、正直、怪しいと思った。

一応理由を尋ねた所、素っ気なく返された答は『皆なぜかすぐに辞めてしまうから』。余計に怪しい。

「なぜこんな高待遇で辞めてしまうんですか？」

『さあ？ 体調を崩したとか、変な物を見たとか、毎晩変な夢を見るようになったとか』

「それって」

『ああ、中には最上階に降りた途端に逃げ帰った人も』

「幽霊？」

『あたくしはそんなモノ信じておりませんけどね』

信じていないと言いながらも、管理人の母親というその人は、明らかにマンションに出向くことを避けている風だった。

大体、住み込んでいるはずの管理人は何をしているのか。事務処理なんて、管理人が済ませればいい話ではないか。

怪しむ気持ちよりも、持ち前の性格で好奇心が圧勝した。

それに何より、あたしは。

快い到着音に促され、あたしは最上階管理フロアに降りた。

他のフロアとは趣の異なる事務的な廊下では、すでに掃除役のおばさんが仕事を始めていた。

「白石さん、おっはよー！ あれ、それは？」

洗濯物を乗せたワゴンを指差して聞く。別の人の仕事だったはずだからだ。

「おはよう。間宮さんがコレなのよ」

おばさんが胸の前でバツ印を作ってみせ、あたしはまたかと苦笑いする。

「どうしてこんないい仕事、みんなすぐに辞めちゃうのかねえ」

理解不能とばかりに首を傾げるおばさんに相槌を打ちつつ、しかしあたしにはその理由が分かっていた。

初めて最上階に降りた時、全身に突き刺さるような強烈な悪寒に、あたしは凄まじい衝撃を受けたものだっただ。

フロア全体を覆う異質な気配。目を凝らすと、その邪悪な淀みが確かに見える。

靈感、第六感、呼び方は知らないが、あたしには幼い頃から特別な物を見る力があつた。

それは母や姉も同じで、先祖の中に功名な巫女がいたとか何とか

とにかく最上階に溜まった邪気は普通ではなかった。分からないまま、体調や精神に影響を受けるのも無理はない。

「白石さんは超ーっ強いよねー！」

奇跡的に鈍感なおばさんの肉厚な肩を叩き、あたしは笑いながら事務室に向かった。

重圧は強いものの、今の所その邪気は人を襲うような物ではない。

死者の怨念やら何やらだったら、普通は生きた人間を引き込もうとか、何かしらの悪さをするものなのだが。

「ここの気配はただこの場所に存在しているだけ。出所も分からない。」

入った人間は大概悪い影響を受けるが、しかし邪氣が何かをしているわけではない。相手が勝手に感じ取り、怯えているだけに過ぎなかった。

（本当に不思議）

あたしは預けられた鍵で事務室に入ると、奥のブラインドを上げて壁一面の窓から朝の光を取り入れた。

丸いテーブルの上には、管理人が置いて行った一週間分の書類や請求書。

「ねえ、あんたら朝陽とか嫌じゃないの？」

あたしは目を懲らしながら邪氣に話かけてみるが、もちろん返事はない。朝陽の中をゆっくりと漂うだけ、良くも悪くも変化なし。

「変わり者よねー、あたしもだけど」

丸っこい革張りのデザインチェアにドサツと背中を預け、あたしはパソコンを起動させて作業に取り掛かった。

途端、スツと後ろを流れる人の気配。

あたしは目だけを動かして気配を見る。スルスルと周囲を回るそれは、若い女の姿をしていた。

あたしと邪氣の間に割り込むように動き回り、時折虫を払うような仕草をする。

「あたしなら大丈夫ですよー？　ありがとうです」

言つと女はしばしあたしをじつと見詰め、そのままスツと陽に溶けて消える。これも毎度のことだった。

あたし含め、ここに関わる誰もが変わり者だ。No.1は、恐らく会ったこともない管理人だろうけど。

あたしは家賃の引き落とし状況をチェックしながら、一人の賃貸契約者の名前の所で目を止める。

折原俊一。

最近気付いたのだが、彼はあたしが受付嬢をしている会社の社員だ。

あの若さでこんな所に住んでいるなんて、さすがは一流企業のエリートと言われるだけのことはある。

関心すると同時に、最近見る彼の様子が少しおかしいことが気になった。

目の下につつすらと隈を作り、露骨に疲れの抜け切らない顔をしている。

仕事が忙しいだけかもしれないが……。彼はここの二つ下のフロアに住んでおり、もの凄く感が鋭い質だったら、邪気の影響を受けていてもおかしくはなかった。

（考え過ぎかなー。こないだドリンク渡してみた時も、変な気配は

感じなかったし)

まあいいか、と、あたしは作業の続きに意識を戻す。

早く終われば早く帰れる。

いやに近く見える快晴の空を眺めながら、あたしは午後の予定を
考えて頬を緩めた。

7・宇宙交差

西田紗枝が大きな花束を持ってマンションに帰ると、ちょうど毎朝会う隣人と出くわした。

「こんばんは。今日は早いんですね」

爽やかな笑顔を浮かべ、折原俊一は紗枝の持つ花束に目を細める。

「綺麗ですね、誰かからのプレゼントですか？」

それは明日、画家だった姉の命日に供える為に買った物だった。しかし仏には相応しくない派手な花ばかりで、折原が勘違いするのも無理はないと紗枝は思った。

紗枝はあえて営業スマイルで頷き、彼の言葉を肯定する。

折原が小さく舌打ちしたことには、全く気付かない。

いい気なもんだ、と折原は顔には出さずに毒づいた。

さり気なくエレベーターの扉を押さえてやりながら、憎い女の華奢な背中、握ったらポキンと折れてしまいそうな首筋を、憎悪の籠った目で睨み付ける。

（この女のせいで恥をかいだ、この女のせいで、畜生畜生畜生畜生畜生）

エレベーターの外を眺める振りをしながら、紗枝はそつとガラス

に映った彼の顔を盗み見る。

怒ったような、思い詰めたような顔。花束を贈った相手のことを勘繰っているのだらう、と紗枝は思った。よくあること。どうでもいい。

紗枝の頭の中は、明日のことで一杯だった。

姉の事件の謎を解いてから、ずっと待ち望んでいた日。姉がその若い命を散らした日、命日に仇を取ると硬く決意していたから。

「西田さんみたいな方は、誘いが多くて大変でしょう」

折原が敵意を悟られないように笑う。女の行為に気付いていない振りを続けた方が、後々都合がいいと考えていた。

「えー？ そんなことないですよ」

面倒臭い。そう思いながらも笑顔で受け応えしてしまう自分を、紗枝はこれを職業病と言うのかしらと冷めた目で客観している。

一方、最上階のとある一室では、管理人がエレベーター内の様子をじっと観察していた。

最近付け変えたばかりの最新型監視カメラは、映像も音声も素晴らしいく鮮明だ。

広々と殺風景な自室でモニターの光を浴びながら、管理人はカメ

ラを調節して二人の顔をアップにした。

大きな花束を抱え、西田紗枝は万遍の笑みを浮かべている。

折原とかいう隣にいる男に貰ったのだろう。管理人は少しだけ眉をひそめる。

西田紗枝は、管理人が心惹かれた、人生二人目の異性だった。

付き合いで嫌々行った夜の店で、たまたま会った派手で傲慢な女。

決して魅力を感じるようなタイプではなかったのに、彼女の中に初恋の人の影を見た。

顔立ち自体がよく似ていたのもあるが、初恋の人、さやかとは比べ物にならないほど下品であばずれ。

だから不思議だった。そもそも、さやかの内から溢れる純粋さ、神聖な輝きに触れて恋をしたのだ。

なのになぜ、少し顔が似ているだけの下劣な女に、いつまでもさやかの影が重なり続けるのか。

理解出来ないままに、管理人はやはり西田紗枝の笑顔に、笑顔を向けられる男に嫉妬を感じてしまっている。

「彼女は、僕の……」

座ったソファーに体重を預けると、天井を仰いで大きく息を吸う。

胸がドクドクと鳴っていた。常に冷静な管理人にとって、こんな感情の高ぶりは対処のしようが無いものだった。

折原という男。何かと普段から、西田紗枝に近付こうとしているのを知っている。

あの笑顔から察するに、西田紗枝も満更ではないだろうと考えていた。

何度か店に通っただけの自分の誘いにあっさり乗り、簡単にこのマンションに引っ越して来た女。

金や権力には弱いだろう。まして折原という男は、外見も申し分ないときている。

管理人はギリギリと奥歯を噛んだ。

「あの女は……あの女は僕の……」

その時、隣の部屋で電話のベルが鳴り出した。

8・さらに宇宙交差

栗栖香織が休日の惰眠を貪っていた時、突然彼女は現れた。

カーテンの隙間から昼近くの日射しが差し込み、香織は夢と覚醒の間をふらふらしていた。

そこにふわりと降りた、とても綺麗な光。

ぼんやりと薄目を開け、香織は小さく呟く。

「あれえ……。地縛霊じゃなかったんだあ……」

そこにいたのは、バイト先のマンションでいつも会う、あの不思議な女性の幽霊だった。

霊に着いて来られることはよくあったが、彼女に対しては何の危機も感じなかった。あの場所から動ける霊だったのかと、少し驚いただけだ。

「……でも……どうしたの、急に……」

深く考えず、再びウトウトと目を閉じかけた時。

油断しきった香織の中に、いきなり彼女の意識が飛び込んで来た。

（えっ！？）

全身に鳥肌が走り、手足の温度が一気に下がって息が止まる。

（油断した油断した油断した！！）

慌ててもがいても、もう手遅れ。

香織の意識は彼女にガツチリと押さえ込まれ、もはや指一本動かすことも出来ない。落下の感覚があった。

（落ちる……！）

ふいに嗅ぎ慣れないにおいを感じて、香織はきつく閉じていた目を開いた。

途端、視界に全く別の空間が広がる。

そこはどこか、深い森の中のようなだった。大きく繁った木々が一面に広がり、重なる葉の間から柔らかな木漏れ日が溢れている。

（どこ？ ……あたしは）

意識がアイスクリームのように蕩けて、別の意識が流れ込みゆるゆると混ざり。

（何なの……これ）

香織の前には大きなキャンバスが置かれていた。足元にはたくさん画材道具が並べられ、絵の具と薄飴色の瓶からは独特なおい。

続きを描かねば、と香織は思い付いた。

今描いている絵は次の個展のメインになるかもしれない作品で、環境破壊に対するメッセージを織り込んだ、大切な作品だった。

（急がないといけない）

焦燥感に押されてキャンバスに挑んだ時、背後の草がカサリと鳴った。

鳥か、それとも鼠か。

振り向かずにいると、少しして再び草が踏まれる、カサリという音。

“さやか”

呼ばれて、ハッと振り返った。それが自分の名前だと、なぜかすぐに分かった。

振り向いた顔に何かの光が鋭く走り、一瞬だけ目が眩み。

次の瞬間、左肩に凄まじい衝撃を受けた。驚いて見開いた目に、ナイフを掲げた若い男の姿が映り、次いで赤い絵の具が鮮やかに散った。

（何！？）

絵の具だと感じたそれが自分の血だと理解する前に、腹に二度目の強い襲撃。

生々しく暴力的な音、体の内側から。

（やめて、痛い！！）

赤く染まった視界が瞬く間に闇色に変わり、苦痛と衝撃から逃れようと必死にもがき、叫ぶ。

（痛い痛い！！）

気付くと、宙に浮かんで惨劇の続きを見下ろしている。

真つ赤な血の池に沈んだ自分を、若い男が一心不乱に切り刻んでいる姿を。

（ああ、やめて、顔は、顔は嫌、嫌ああああ）

狂いそうな思いの慟哭、けれど相手には届かなくて。

血塗れのナイフが乱暴に眼球をえぐり出し、こじ開けられた口から舌が、皮膚ごと切り裂かれた衣服の下から、乳房が腹が性器が…

……

（うあああああつ！！）

男は、切り刻んだ肉を口にしていた。

恍惚の表情で咀嚼し、顔を真つ赤に汚しながら、瞬きもせず飲み込んでいた。

（嫌、嫌、嫌あああつ！！）

あまりの光景にパニックを起こしながら、それでも香織は必死に自分に言い聞かせた。

（違う違う違う！　これはあたしの記憶じゃないっ！！）

場面が変わり、次には無惨な遺体を遠巻きに囲む、数人の男女の姿。

殺人者の男は後ろ手に取り押さえられ、呆然と空を見上げている。

近くで泣き叫んでいる女には見覚えがあつた。バイトの面接をした、マンション管理人の母親とかいう女だ。

『お父様のせいよ！　この子やっぱり、あの事件の時におかしくなつてたんだわ！』

金切り声を上げる女を、夫らしき男が強く抱き寄せ黙らせる。

『とにかく、これはうちとは関係ないことだ。息子は何もしてないし、これは地元の変質者の仕業だ』

震えてはいるが、力強く決意に固い声だった。

『分かったら、早く警察に手を回せ！　金ならいくらかかっても構わん！！』

（何てことを……）

刹那、燃え上がるような憤怒と絶望が一気に意識を包み込んだ。

その激しさに香織は堪らず絶叫する。

（意味が分かんない！！ いきなり何なの！？ いい加減にしてよっ！！）

目に見えない戒めを全力で振り払う。

深く息苦しい水底から命からがら浮上するように、香織はようやく意識の表層に逃げ戻った。

（くっそ……）

精神の疲労というのは、肉体のそれとは違うリスクを孕んでいる。

全く予期せぬ不意打ちに相当打ちのめされはしたが、そこはただの凡人とは違う香織。数秒で心の安定を整え、臨戦体制で気を引き締める。

（ちょっと！ あんた、今すぐあたしの体から）

出て行きなさい、と一喝するつもりだった。

しかし香織は、またもや予期せぬ光景を目にして、一気に覇気を失ってしまった。

（何で、このマンション……！？）

バイトで毎週一度訪れる高級マンション、それが今目の前にある、いや、今自分は車のドアを閉め、真っ直ぐにマンションに向かって歩いて行く所だ。

（何でここにいるのよおおお！！）

僅かな時間だと思ったのに。死者の過去の記憶を見せられていた間に、体を操られてここまで来たというのか。

（有り得ない！ 有り得ない！ 止めて嫌、ここは）

内側で絶叫する香織に、女が初めて答を返した。

《ここは、私を食った男がいる場所》

（あ、あんたずっとここにいたじゃない！ 何で？ 今更あたしを引っ張り出してどうするって言うのよ！）

《止めるの》

（何を！ つーか、こんだけの力を持つてるなら一人でやってよ！）

《必要だから、駄目》

（何がよおおおお！！）

《肉体》

香織は颯爽とした足取りで、高級マンションのエレベーターに乗

り込んで行った。

9・宇宙融合

西田紗枝はゆっくりとバッグの中身を確認し、三度それを繰り返した後、自室を出た。

紗枝はよそ行きのドレスを着ていた。派手ではないが、シックで艶めいた黒のサテンドレス。喪服の意味を持たせていた。

（さやか姉さん）

胸の前でバッグをギュツと抱き締め、何度か深く息を吸ってから階段を昇り始める。

管理人には、昨日の夜に電話で約束を取り付けてあった。相談があるので明日時間を貰えないかと言うと、二つ返事であっさり承諾してきた。

ようやく、待ちに待ったこの日が訪れたのだ。

気持ちを落ち着けるように、一段一段、紗枝はゆっくりと階段を踏み締めて上に向かう。

＋＋＋＋＋

自然音楽を流した明るい室内で、管理人は静かに窓の外を眺めていた。

もうすぐ紗枝がこの部屋に来る。昨日電話を受けた時には驚いたが、恐らく金絡みの相談だろうと検討を付けていた。管理人にとつて、理由などはどうでもいいこと。

そろそろ彼女を……と私案していた矢先に、初めて向こうからの誘い。このあまりのタイミングの良さには、何か神秘的なものすら感じていた。

奇しくも今日は、愛するさやかの命日なのだ。

（君が呼んでくれたのかい？ ……さやか）

子供が親に甘えるような表情で、管理人は閉じた瞼の向こうに心の中で囁きかけた。

＋＋＋＋＋

出社しようとしていた折原俊一は、エレベーターで予想外の人物と遭遇した。

「え？ 栗栖さん？」

栗栖香織。俊一が勤務する会社の受付嬢だ。

その彼女がなぜ、こんな時間にこのマンションにいるのか。

香織の化粧気のない顔にはいつもの笑顔はなく、無表情な目が冷たく俊一を眺めている。

「えつと……」

香織はふいと視線を外すと、挨拶一つ無く上へ昇っていつてしまった。

（何なんだあの態度……）

最上階で点灯したままの階数ランプを見やりながら、俊一は戸惑い紛れに毒づいた。

（この間の事といい、あんな女だったなんて幻滅だ）

改めてエレベーターを呼び直した俊一は、しかしそこで動きを止めた。

最上階には管理人しかいないはずだった。資産家の息子でありながら、三十路過ぎまで親のすねをかじり続けている腑抜け男、有名な暇人だ。

そんな所にあんなラフな恰好で、まして化粧もせず何の用があるというのか。

（管理人と知り合いなのか？）

妙だと思った。なぜ最近こうも、あの受付嬢と変な関わり方ばかりをするのか。

さっきの態度もそうだ。いくら勤務時間内ではないからといって、職場の社員にあんな対応は有り得ない。

完全無欠だった自分の日々を掻き乱している元凶、その臭いを感じた。勘だ。

栗栖香織。マンション。管理人。栄養ドリンク。目の下の隈。抜けない疲れ。エリートな自分。

様々な材料が俊一の意識上に浮かび、それぞれの意味をちらつかせながら回転した。

（この管理人なら、賃貸者の仕事に関して色々知っていても不思議はない。親の資産とはいえ、金も持っている）

独自の論理に基づいて、次々に整頓されていく記憶の材料。

（考えてみれば……、敵意剥き出しの馬鹿女が、たまたま隣の部屋に越して来たというのも不自然じゃないか）

だがしかし、それが彼女本人の意思によるものでなかったなら。

隣の女も受付嬢も、渡された報酬に目が眩んだだけの、単なる道具だったとしたなら。

（それなら、栗栖香織のさっきの態度も理解出来る）

成功者である自分の間近にいて、暇を持て余した惨めな道楽者。嫉妬溢れる視線で自分を見詰め続けた、本当の敵。

（管理人が全ての黒幕だったとしたなら……、全ての辻妻が合う！）

＋＋＋＋＋

さやかに押さえ付けられたままの香織の意識は、最上階に下りてすぐ、例の邪気に触れてその濃厚さに怯んだ。

体を自由に出来ていた時には気付かなかった。肉体というプロテクトが、いかに強靱な護りだったかを、香織は今になって初めて知った。

（ひい、ひいひいっ！）

フロア全体に満ちていた邪気。こうまでも垂れ流しにされていた醜い歪み、その根源が“生きた人間”だったという事実。

そのあまりに救い様のない現実には、剥き出しにされた香織の精神は耐え切れずに絶叫した。

（管理人の所には行きたくない！！ 止めて止めて止めて止めて！！
あんな狂人の所に行ったらあたしはあたしはあたしああああ！！）

恐怖に乱れた香織の意識を易々と掀伏せると、さやかは真っ直ぐに通路を進んで行った。

カツカツ、カツカツと、靴音を生身の耳で聞くのは本当に久しぶ

りのことだった。その生の感覚は生きていた頃の記憶を強く刺激し、人間らしい感情を呼び起こすには充分過ぎた。

さやかは惨殺された後も、生前同様に神聖な魂を保ち続けていた。殺された時の苦痛や絶望に苛まれ成仏出来ずにいながら、他者に憎しみを向けることは決してせずに。

それ所か自分を殺した相手を憐れみ、その邪気から他人を護ろうとさえしていた。

それはさやかの天性の純粹さゆえであり、何の見返りも求めない行動だった。それだけ、さやかの魂には曇りが無く真っ直ぐなのだった。

それ故に。

一つの確固たる目的を持った今のさやかには、ほんの些細な迷いも無い。

（妹には手を出させない）

+++++

大宇宙の彼方では、いつも華々しい衝突や融合が行われている。

それは日常茶飯事で。

小宇宙同士でも同じこと。

今日この晴れた美しき昼下がり、とある高級マンションの最上階、独特な宇宙達が集まって、今正に衝突せんとピリついている。

（姉さんの仇を取る為に）

（食してあの娘と一体になる為に）

（奴が黒幕だと暴いたら、その時は）

（愛しい妹を護る為に）

宇宙、融合、カウントダウン。

今全ての意思が一つにまとまり、点が線で結ばれた。キツチリと、それすなわち。

《殺す！！》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9439h/>

お隣宇宙

2010年10月28日04時04分発行